

つらくても頑張つて
こうなつた

庫発りべるき

本書は体験版です

〈はじめに〉

本編をお読みになる前に付属の利用上の注意をご確認ください。

〈本編開始〉

今年もまたやってきた。桜が咲くこの時期、新生活がスタートするという者も多いんだろうな。

社会人としての第一歩を踏み出す若者だって……

そして今年もまた、こんな言葉が飛び交うことだろう。

新入社員となった者たちに。

職場でつらいことがあっても頑張っていればそのうち時間が解決してくれる。

辞めたくなくても辛抱するべき。ある程度の期間は耐えるべき。働き続けろ。

主に新聞でこれらのコラムをよく見かける。

俺も社会人になりたての頃は、親からあれこれ言われたものだったな。俺の場合は社会人としての心構えはこうあるべき、なんてところか。

だが職場の「つらいこと」の内容次第では、早く辞めてもおかしくない、ということもある。

それどころか……

「こんな会社、全社員が早急にやめるべきだ」と言いたくなることもある。

それが……現在、満七十一歳の俺が考えていることである。

そう考える理由について。もちろん度が過ぎる劣悪な労働環境で働き続ければそのうち心身がボロボロになるので、そうなる前に辞めるのが賢い選択だと考えられることがある。

この程度ならある程度思考力があれば理解できるのでは。俺はそう思っている。

だが俺が今考えているのはそればかりではない。

場合によっては職場で頑張り続けた結果、職場とは無関係の者にまで被害が及ぶこともある。

それについても俺は考えてはいたのだが、まさかこんなことになるうとは。

桜の時期がすでに終わっている、ある日のこと。何の変哲も無い、晴れた平日の午後。

俺は一人、家にいた。

すでに妻は他界している。息子夫婦は共働き、孫は中学一年で学校にいる。

一つの音が聞こえる。

誰かがインターホンを鳴らしたようだ。

「どちら様ですか」

俺は相手の正体を確かめるべく、台所にあるインターホンにあるカメラの映像を確認した。

知らない若い男だった。見た目変わったことは無さそう
だ。

「実は私、この辺を訪問している……」

「どうやら家のリフォームの業者らしい。」

俺は言った。

「そういう話ならお断りします」

「あの一、お話だけでも聞いていただけませんか」

「それもお断りします」

こうなったら言葉に不信感を織り交ぜてやる。

「……わかりました」

相手は何か言いたそうだったが、無駄だと思っただけらしく
引き下がっていった。

ケツ。誰がお前なんか相手にするかよ。

俺は不快な思いに駆られていた。

今のような輩を「ウザい」と表現するのがよろしいみたい
だな。

〈続きは製品版で〉

〈本編を少し予告〉

この男性は近所を散歩していると、自分より年上の一人
暮らしの男性の家があり、そこでは……

著者 庫発りべるき

発行 データコーディネートフォルダー

二〇一四年 六月七日

(C) Kohatsu Riberuki